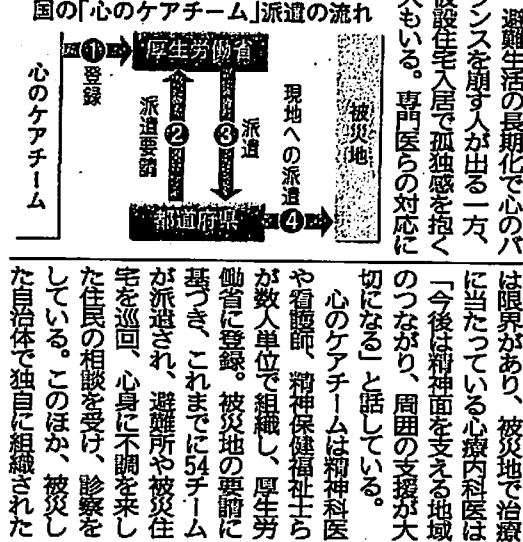


# 「心のケア」に被災者1万4000人

## 岩手・宮城 不眠や不安訴え

東日本大震災で被害の大きかった岩手、宮城両県で、精神科医らによる「心のケアチーム」の相談支援や診察を受けた被災者が少なくとも延べ1万4000人に上ることが25日、分かった。両県や仙台市が明らかにした。津波で家族や家、職を失い、不眠や不安、いら立ちを訴えた人が多数を占め、被災者の精神的サポートの必要性があらためて浮き彫りとなった。



心のケアチーム 地震や津波などの被災地で、災害のストレスによって心身に不調を来した住民や、受診先がなくなった精神障害者への対応をする医療チーム。精神科医や看護師、保健師、精神保健福祉士などの専門家が、教団単位や避難所や被災住宅、在宅患者を巡回する。継続的な診療を要する場合は地域の医療機関を紹介し、必要な時には投薬も行う。東日本大震災では、厚生労働省が災害対策基本法に基づき54チーム、計2450人を指定。宮城、福島3県に派遣している。

ケアチームも巡回している。宮城県精神保健福祉センターによると、政令市の仙台市5月27日現在で延べ8318人を除く県内では3月17日から活動を開始。中心市街地が壊滅的な被害を受けた気仙沼市や南三陸町を抱えていることもあり、支援をした被災者は5月27日現在で延べ8318人に上った。最も多かった症状は「不眠・睡眠障害」で1891人。

「不安・恐怖」が954人、「イヤイヤ」を訴えた被災者も369人いた。「抑うつ気分」が278人、「無気力」も126人と多かった。「食欲不振やアルコール問題」の相談も数多く寄せられた。仙台市では、3月14日からケアチームが活動を始め、6月11日まで診療などをした被災者は延べ2310人。岩手県は3月18日から4月30日にかけて延べ3483人で、5月以降の数字は集計中のため、人数はさらに膨らむ見通しだ。

## 増える子どもたちの不調



子どもたちのカウンセリング後に教諭(右)と話す渡部京太郎師(左) 奥＝23日、宮城県石巻市

東日本大震災から3カ月が過ぎ、被災地の小・中学校では頭痛やだるさなど、体の不調を訴える子どもがじわじわと増えている。不登校気味だった児童が震災後さらに学校から遠ざかってしまったりもあり、宮城県石巻市では、心のケアチームの協力を得ながら対応に当たっている。

石巻市にある小学校のカウンセリングルーム。男子児童と母親が、児童精神科医療部京太郎(42)と約1時間話し合った。不登校気味だった男児は震災直後、「頭張らなや」と学校に通い始めていた。だが父親の遺体が見つかった以後、再び学校に来られなくなったという。

「5月の連休明けから児童の震災ストレスが本格化してきている」と話すのは、同校の女性養護教諭(49)。親やきょうたいを「し」眠れない」と不眠や頭痛を訴えたり、保護者から児童の赤ちゃんと返りについて相談を受けたりすることが増えたという。

被災の大きかった中学校でも状況は同じだった。5月以降「もう頭張れない」「だるい」と頻りに頭痛を訴える生徒が目立ち始めた。教諭は「不調の理由を話したがらない子どももいる。専門家が来てくれるのはありがたい」と話す。

渡部さんが所属する国立国際医療研究センター国府台病院(千葉県市川市)は、隔週で児童精神科医らを「心のケアチーム」として石巻市に派遣してきた。

渡部さんは「子どもたちが厳しい現実を受け入れられるまでには時間がかかる。自発的に話したがらない子どもが多いので、周囲の大人が話をじっくりと聞くことが、今以上に大切になる」と話している。